

イエス・キリストの啓示 - 第1号

啓示の種：たとえ話から最終警告まで、預言のタペストリーを解き明かす

Jeff Pippenger

2023-07-29

アメリカ合衆国は聖書の中で明確に特定されている。世の終わりにおいてアメリカ合衆国を明確に指し示す聖書の箇所がいくつかある。黙示録13章では、アメリカ合衆国は第二の獣、すなわち地から上ってくる二本の角を持つ獣であり、獣の刻印を持つ者を除いて、全世界に対し売買を禁じる。

そして私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。それは小羊のような二本の角を持ち、竜のように語った。彼は第一の獣の前でそのすべての権威を行使し、致命的な傷が癒やされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに拝ませた。彼は大いなるしるしを行い、人々の見ている前で、天から火を地上に降らせた。また彼は、その獣の前で行う力が与えられていたあの奇跡によって、地に住む者たちを惑わし、剣の傷を受けながらも生きたあの獣の像を造るように、地に住む者たちに命じた。彼には獣の像に息を与える力があり、その獣の像が語り、また獣の像を拝まない者はことごとく殺されるようにした。彼はまた、小さな者も大きな者も、富む者も貧しい者も、自由な者も奴隷も、すべての者に、右手か額に刻印を受けさせた。そして、その刻印、または獣の名、またはその名の数を持つ者以外は、誰も物を買うことも売ることもできないようにした。

ここに知恵がある。悟りのある者は獣の数を数えよ。それは人間の数である。その数は六百六十六である。黙示録 13:11-18。

この箇所には、二本の角を持つ地の獣に関連する七つの主要な預言的特徴がある。彼は自分に先立つ獣の権威を行使する；彼は世界のすべての者に、自分に先立つ獣を拝ませる；彼はすべての人が目にする大いなるしるしを行う；彼は全世界を惑わし、世界に命じて自分に先立つ獣の像を造らせる；彼はその獣の像に息を与え、像が物を言うようにする；彼は死刑という罰をもって、全世界にその獣の像を拝むことを強いる；そして、彼は全世界の人々に額または手に刻印を受けさせ、獣の刻印・名・あるいは数を持たない者には売買を禁じる。

十一節で「地から上ってくる」とある獣が行う欺きの業は、あまりに巧妙かつ強力で、「地に住む者たちを惑わす」ほどである。全世界はアメリカ合衆国によって欺かれるだろう。すなわち、神の教会を除いて、全世界は反キリストの刻印を受け入れるように欺かれるのである。この世界規模の欺きに先行する預言的出来事は、すでに進行中である。

聖書には、多くの人が少なくとも表面的には知っている物語がある。ほとんどの人は、モーセとファラオ、ダニエルとネブカドネザル、あるいはイエスとピラトの対決について聞いたことがある。人々はこれらの聖書の物語をさまざまな理解の程度で知っているが、聖書の預言が王や王国を直接的かつきわめて具体的に特定していることには、必ずしも気づいていない。これは確かにモーセ、ダニエル、そしてキリストについて当てはまった

. エジプト、バビロン、ローマは、それぞれの王国に関する預言を成就することになる歴史に先立って、聖書の預言の中で具体的に名指しされていた。神は決して変わらない。

わたしは主であって、変わることがない。それゆえ、ヤコブの子らよ、あなたがたは絶やされることはない。マラキ 3:6

イエス・キリストは、昨日も今日も、永遠に同じです。ヘブライ人への手紙 13:8.

神が決して変わらないという事実は、黙示録13章の二本の角を持つ地の獣について私たちが考える際に、簡単な論理を当てはめることを可能にします。神が、エジプト、バビロン、ローマの王国を、それぞれが神の教会と関わり、迫害したときに直接特定する預言を示されたことを私たちは知っているので、黙示録13章の地の獣に関していくつかの事実を確立することができます。地の獣は、エジプト、バビロン、ローマと同様に、その国に関する預言が歴史上成就する以前に、聖書の預言の中で直接特定されるでしょう。私は、この事実は非常に単純だが重要な聖書の原則に基づいて確立できると言います。その原則は、真理は二人の証言によって確立されることを示しています。

二人または三人の証人の証言によって、死罪に当たる者は死刑に処せられなければならない。ただし、一人の証人の証言によっては、死刑に処してはならない。申命記 17:6

一人の証人だけでは、人が犯したいかなる不法や罪についても、人に不利な訴えは成り立たない。二人または三人の証人の口によって、事柄は確定される。申命記19章15節

これで三度、あなたがたのところに行くこととなります。二人または三人の証人の証言によって、すべての事柄は確定します。コリント人への手紙第二 13:1

長老に対する訴えは、二人または三人の証人による場合でなければ受け入れてはならない。テモテへの第一の手紙 5:19.

聖書の預言は、神がエジプトの反逆的なファラオに対処されたときに起こる古代エジプトの滅亡を預言した。聖書の預言は、古代バビロンの興亡を預言し、同時にバビロンの反逆的な王たちをも取り扱った。聖書の預言は、異教ローマ帝国の興亡を預言し、ローマの腐敗した代表者を指摘し対処した。変わることのない神の御性質の一貫性は、聖書の預言において言及される最も重要な王国-黙示録13章の地の獣-が、聖書の預言によって必ず特定されることを示している。

黙示録13章の地の獣に関する預言が成就するとき、神の教会は、モーセ、ダニエル、キリストによって預言的に示されているとおりに、地の獣の政治的・宗教的指導者と対峙することになる。世の終わりにおけるアメリカ合衆国の預言的役割は、聖書預言の主要な主題である。聖書預言におけるアメリカ合衆国の役割を明らかにするために聖書的情報を展開していくにあたっては、私たちは聖書の中に見いだされる規則を用いる。神の言葉は人間の定義を必要としないからである。古代イスラエルには、儀式の規則、健康の規則、十の道徳的規則、農業の規則などが与えられた。神は秩序の神である。

すべてのことを品位と秩序をもって行いなさい。第一コリント 14:40.

聖書の記録には、神によって与えられた掟をただ無視するだけで人が祝福されると示唆するものは何ひとつない。預言研究のために聖書の中に、また聖書によって確立された預言解釈の原則を無視して、誰が祝福を期待できるだろうか。

さあ来なさい、共に論じよう、と主は言われる。たといあなたがたの罪が緋のようであっても、雪のように白くなる。たとえそれが深紅のように赤くても、羊毛のようになる。イザヤ書 1:18

私たちが聖書の原則を用いるにあたっては、その原則が真か偽かの確立と検証は聖書に委ねます。神のさまざまな原則には、いつもそれを模したサタンのような偽物が存在します。したがって、真理を確立するために原則を用いるときには、見いだされた真理と用いた原則の双方を試し、吟味することが不可欠です。

愛する者たちよ、すべての霊を信じてはならない。霊が神からのものかどうかを試しなさい。多くの偽預言者が世に出て行ったからである。ヨハネの第一の手紙4章1節。

この研究でアメリカ合衆国の預言的役割を特定することに加えて、もう一つの目的は、イエスがこの特定の世代まで隠していた黙示録の秘密のメッセージを明らかにすることです。

隠されたことは、私たちの神、主のもの。しかし、明らかにされたことは、永遠に、私たちと私たちの子どもたちのもの。それは、私たちがこの律法のすべてのことばを行うためである。申命記 29:29。

明らかにされる神の預言的な奥義は、それを受ける者が神の律法を守れるようにするためのものです。人は、その律法が心に書き記されているときにのみ、それを守ることができます。黙示録で封印が解かれているその奥義は、聖霊が神の律法を私たちの内側と心に書き記す過程の一部です。神の民に開かれたその奥義は、信仰によって受け入れられるなら、新しい契約を確立します。

見よ、主は言われる、その日が来る。わたしはイスラエルの家およびユダの家と新しい契約を結ぶ。これは、わたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出した日に彼らと結んだ契約のようではない。彼らはわたしの契約を破った。わたしは彼らの夫であったのに、と主は言われる。しかし、これが、わたしがその日々の後にイスラエルの家と結ぶ契約である、と主は言われる。わたしはわたしの律法を彼らのうちに置き、彼らの心にそれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。エレミヤ書 31:31-33。

「この地上の歴史の終わりの日々、戒めを守る神の民との契約は更新される。」 Review and Herald, 1914年2月26日。

ヨハネの黙示録 1:1-3 最後の警告のメッセージ:

イエス・キリストの啓示。これは、神が彼に与え、しもべたちに、まもなく必ず起こることを示すためのものである。また、御使いを遣わし、そのしもべヨハネにこれを示した。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、そして自分の見たすべてのことについて証言した。この預言のことばを読む者、これを聞き、その中に書かれ

ていることを守る人々は幸いである。時が近いからである。黙示録 1:1-3。

黙示録1章の最初の3節は、「イエス・キリストの黙示」が人類への最後のメッセージであることを示している。これは明らかにメッセージである。なぜなら「イエス・キリストの黙示」は、「間もなく起こるべきこと」を彼のしもべたちに示すために、天の御父から彼に与えられたからである。

「『聖霊が事柄をそのように形づくったのは、預言が与えられることにおいても』また『描かれている出来事においても』であると考えるように言われている。」

「聖霊は、預言が与えられることにおいても、描かれた出来事においても、人間の器は目立たないように、キリストのうちに隠され、天の主なる神とその律法が高く掲げられるべきであることを教えるように、事柄をそのように形づくられた。ダニエル書を読みなさい。そこに示されている諸王国の歴史を、順を追って思い起こしなさい。」
Testimonies to Ministers, 112.

ヨハネの黙示録1章の最初の三節に描かれている「出来事」および「預言が与えられること」は、神が人にどのように語りかけるのかという段階的な過程を具体的に示しており、また、伝えられるメッセージが「イエス・キリストの黙示」と呼ばれることを明らかにしている。

それからイエス・キリストは、神から受け取ったメッセージについて二つのことをなされた。御使いを遣わしてそのメッセージを送り、また、その御使いを通してそのメッセージをしるしをもって示した。御使いはそのメッセージを預言者ヨハネのもとに携えて行き、ヨハネはそれを書き記し、あなたと私のために諸教会に送った。最初の三節は、「聖霊」によって「そのように形づけられ」、「メッセージ」と、そのメッセージを届けるのに関わる「伝達の過程」の双方が強調されるようになっていた。

私たちが考察している三つの節は人類への最後のメッセージを示している。だが、それは単なる最後のメッセージではない。さらに重要なのは、これら三つの節が地球という惑星に対する最後の「警告」のメッセージを表しているという点である。このメッセージが「警告」であることは、「そこに書かれている事柄」を読み、聞き、守った者たちが「祝福されている」とされていることによって示される。「イエス・キリストの啓示」として示されている警告を読みも聞きもしない一群の人々がいる。彼らが祝福されることはありえない。「そこに書かれている事柄」を読み、聞き、守ることによって祝福される一群がいるなら、祝福されない一群がいるのは明らかである。人は「イエス・キリストの啓示」のメッセージを読み、聞き、守るだろうか。もしそうするなら祝福され、そうしないなら呪われる。

預言者は言う。「読む者は幸いである」——読むことをしない者たちがいる。祝福は彼らのためのものではない。「また、聞く者たち」——預言に関することは何一つ聞かまいとする者たちもいる。祝福はこの種の者のためのものではない。「また、その中に記されている事柄を守る者たち」——黙示録に含まれている警告と教えに従おうとしない者が多い。これらの者のうち、約束された祝福を主張できる者は一人もいない。ここに厳粛に与えられている象徴を嘲り、預言の主題をあざける者は皆、また生活を改めて人の子の来臨に備えることを拒む者は皆、祝福されない。——『大争闘』341ペー

ジ

第三節の「時が近い」という表現は、歴史において最後の警告のメッセージが到来する、その特定の時を指し示している。「その『時』－(特定の時)－は近い」。特定の時がまさに到来しようとしている、すなわち近いということであり、神の民（ヨハネによって代表される）は、その「時」が来る前にそのメッセージを理解する。ヨハネは一世紀の終わりごろに黙示録を記したが、これらの節は、西暦100年をはるかに過ぎた歴史のある時点に、最後の警告のメッセージが宣べ伝えられることを示している。その「時」が「差し迫った」とき、「まもなく起こらなければならないことがら」を示すメッセージが神のしもべたちに明らかにされる。

本連載では、私たちが引用する聖書箇所を裏付ける権威として、聖書とエレン・ホワイトの著作を用います。

また、ウィリアム・ミラーがまとめた預言解釈の規則と、『Prophetic Keys』と題する編纂書で示されている規則も参照します。さらに、Habakkuk's Tables と呼ばれる預言研究も用います。

私たちは、用いるすべての規則を定義するつもりはありません。簡潔を期すため、規則のより詳細な証明を読みたい方には『Prophetic Keys』集成を参照するにとどめます。『ハバククの表』シリーズでは、ここで簡単に触れる主題がより深く取り上げられている特定の発表を指し示すことを意図しています。

ヨハネの黙示録の学びを進めるにあたり、一般からのご意見を歓迎しますが、進行中の学びに寄与する内容にのみ対応いたします。私たちの議論の範囲には、現在の一連の講義、私たちが用いる預言の規則、そしてハバククの表に記載されている情報が含まれます。

イエス・キリストの啓示。これは、神が彼に与え、しもべたちに、まもなく必ず起こることを示すためのものである。また、御使いを遣わし、そのしもべヨハネにこれを示した。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、そして自分の見たすべてのことについて証言した。この預言のことばを読む者、これを聞き、その中に書かれていることを守る人々は幸いである。時が近いからである。黙示録 1:1-3。

「signified」と訳されるギリシャ語は「示す」を意味する。彼は「彼の」天使によってそのメッセージを送り、「彼の」天使によってそれを示した。「彼の」天使はガブリエルである。

天使の「私はガブリエル、神の御前に立つ者である」という言葉は、彼が天の宮廷において非常に高い栄誉の地位にあることを示している。彼がダニエルにメッセージを携えて来たとき、こう言った。「この事において私を助ける者は、あなたがたの君であるミカエル [キリスト] のほかにはいない。」ダニエル10章21節。黙示録において救い主はガブリエルについて語り、「彼は御使いを遣わして、そのしもべヨハネにこれを示された」と言われた。黙示録1章1節。The Desire of Ages, 99。

天使ガブリエルはそのメッセージを携えて遣わされると同時に、そのメッセージそのものをも象徴している。人類が、最終的な警告のメッセージが告げ知らせられるべき「時が近づいた」という歴史の時点に至ったとき、その最終のメッセージは天使によって表さ

れる。ヨハネの黙示録では、メッセージはしばしば天使として表現されており、もちろん、黙示録で「天使」と訳されているギリシア語は「使者」を意味する。

歴史の中に到来した神の真理のあらゆる啓示は、確かにイエス・キリストの啓示である。しかし、黙示録1章におけるイエス・キリストの啓示は人類への最後の警告であり、それは「時」と表現される特定の時点に起こる。黙示録にはもう一つ、ヨハネが「時は近い」と言及している箇所がある。その別の箇所は、1節から3節について私が最初に述べた主張を検証するための第二の証しとなる。

彼は私に言った。「これらのことばは信実で真実である。聖なる預言者たちの主なる神は、まもなく必ず起こるべき事をそのしもべたちに示すために、その御使いを遣わされた。見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」

そして、わたしヨハネは、これらの事を見、また聞いた。わたしが見て聞いたとき、これらの事をわたしに示してくれた御使いの足もとにひれ伏して、拝もうとした。

すると彼は私に言った。「いけない。私はあなたや、あなたの兄弟である預言者たち、またこの書の言葉を守る者たちと同じ仲間であり、同じしもべだ。神を拝め。」

また彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封じてはならない。時は近いからである。不正な者はなおも不正のままであれ。汚れた者はなおも汚れたままであれ。正しい者はなおも正しいままであれ。聖なる者はなおも聖なるままであれ。」黙示録 22:6-11.

黙示録の終わりには、黙示録の冒頭と同じ主題が見られる。「主なる神」が「間もなく起こるべき事をそのしもべたちに示すために御使いを遣わされた」とあるとき、啓示の伝達の過程とそのメッセージについて再び言及されている。そして、しもべたちに「間もなく起こるべき事」を明らかにするメッセージが示されるやいなや、キリストはご自分がすぐに来られると告げられる。これはキリストの再臨に先立つメッセージであり、したがって最終の警告のメッセージであって、第1章1節で「イエス・キリストの黙示」と表されているのと同じメッセージである。黙示録の最初の三節で約束されている祝福は、「この書の預言の言葉を守る者は幸いである」という宣言によって繰り返されている。

これらの節では、第1章で示された伝達の過程がさらに展開されています。というのも、ガブリエルがヨハネにメッセージを伝えた後、ヨハネはそのメッセージに圧倒されてガブリエルを礼拝しようとし、ガブリエルはその誤解を機に、天の御使い、地上の預言者、そしてこのメッセージの言葉を守るすべての者が「同じしもべ」であり、礼拝すべきは神の被造物ではなく、創造主なる神であることを示すからです。

これらの節は、私たちが第一章で考察しているのと同じ出来事とメッセージを述べている。それらは、神のしもべたちに間もなく必ず成就する事柄を示す、忠実で真実な言葉を繰り返している。メッセージは再び、神とそのしもべたちとの間の伝達の過程という文脈の中に置かれている。第二十二章では、そのメッセージが最終の警告メッセージであることを示すさらなる証拠が見いだされる。というのも、「時」が「近い」とされているのは、人類の恩恵期間が閉じる直前のことであると示されているからである。すなわち、「不義な者はなおも不義を行い、汚れた者はなおも汚れたままであり、義なる者はなおも義を行い、聖なる者はなおも聖であれ」という宣言が、恩恵期間の終結を画し、それが最

後の七つの災いの始まりを告げ、その七つの災いはやがてキリストの再臨によって締めくくられるのである。

「その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時までかつてなかったような苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民は救い出される。書に名を記されている者は皆。」ダニエル書12章1節。

第三天使のメッセージが閉じられると、憐れみはもはや地上の罪ある住民のために訴えない。神の民はその働きを成し遂げた。彼らは「後の雨」「主の御前からの潤い」を受け、目の前の試みの時のために備えられている。天では御使いたちが慌ただしく行き来している。地から戻ってきた一人の御使いが、自分の働きは終わったと告げる。最後の試験が世にもたらされ、神の戒めに忠実であることを証明したすべての者は「生ける神の印」を受けた。そこでイエスは天の聖所での取りなしをおやめになる。御手を上げて大声で「事は成った」と言われ、そして厳粛な宣言をなさるとき、すべての御使いの軍勢はその冠を脱ぐ。「不義な者はなお不義を行え。汚れた者はなお汚れたままであれ。義なる者はなお義を行え。聖なる者はなお聖くあれ。」黙示録22章11節。すべての者の運命は、生か死かについて決定された。『大争闘』613。

『ヨハネの黙示録』の冒頭と末尾で、同じ物語が示されている。二つの箇所を合わせて読むと、『イエス・キリストの啓示』は、キリストの再臨に先立つ人類への最後の警告のメッセージであることがわかる。そのメッセージは、猶予期間が閉じる直前に到来する天使によって象徴的に表されている。『時が近い』-すなわち猶予期間が閉じる直前-に封印が解かれるそのメッセージを、人々が読み、聞き、守るかどうかに基づいて、そのメッセージは人類を二つの部類に分ける。

この世の歴史の終わりが近づくとつれ、終わりの時に関する預言は、とりわけ私たちの学びを求めています。新約聖書の最後の書には、私たちが理解すべき真理が満ちています。サタンは多くの人の心の目をくらませ、彼らが黙示録を学ばないためのあらゆる口実を喜んで受け入れるようにしてきました。

ヨハネの黙示録は、ダニエル書と合わせて綿密に学ぶ必要がある。神を畏れるすべての教師は、私たちの救い主がご自身でそのしもべヨハネに知らせるために来られた福音を、いかに最も明瞭に理解し、提示すべきかを考えるべきである。「イエス・キリストの黙示。神は、しもべたちに、まもなく起こるべきことを示すために、これをイエス・キリストにお与えになった。」その象徴が一見神秘的に見えるからといって、黙示録の研究において落胆してはならない。「あなたがたのうちに知恵の欠けている者がいるなら、その人は、すべての人に惜しみなく与え、責めることのない神に求めなさい。」「この預言のことばを読む者、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。」私たちは、黙示録に含まれている偉大で厳粛な真理を、世界に向かって宣べ伝えるべきである。これらの真理は、神の教会の方針と原則そのものの中にまで取り入れられなければならない。この書については、より入念で、いっそう勤勉な研究が行われ、その中に含まれる真理、すなわち、終わりの日々生きるすべての人に関わる真理が、さらに熱心に提示されるべきである。主にお会いする備えをしているすべての人は、この書を、熱心な研究と祈りの主題とすべきである。それは、その名が示すとおり、この地上の歴史の終わりの日々起こる最も重要な出来事の啓示にほかならない。ヨハネは、神のことばとイエス

の証しに忠実であったがゆえに、パトモス島に流された。しかし、その流刑が彼をキリストから引き離すことはなかった。主は、流刑中の忠実なしもべを訪れ、この世に起ころうとしている事柄についての教えをお与えになった。

この教えは私たちにとって何よりも重要である。なぜなら、私たちはこの地上の歴史の終わりの日々に生きているからである。間もなく、私たちは、キリストがヨハネに起こるべきこととして示された出来事の成就の時に入る。主の使者たちがこれらの厳粛な真理を述べるにあたっては、自分たちが永遠的な重要性をもつ事柄を扱っていることを自覚し、自分の言葉ではなく神から与えられた言葉を語るができるよう、聖霊のバプテスマを求めるべきである。

ヨハネの黙示録は人々に開かれなければならない。多くの人はそれを封印された書と教えられてきたが、それが封印されているのは、真理と光を退ける者にとってだけである。その中に含まれている真理は宣べ伝えられなければならない。人々が、間もなく起ころうとしている出来事に備える機会を持てるように。第三天使のメッセージは、滅びゆく世界の救いの唯一の希望として提示されなければならない。

「終わりの日々の危難が私たちに臨んでおり、私たちの働きは、人々が置かれている危険を警告することである。預言によって間もなく起こると示された厳粛な場面に、触れずにはならない。私たちは神の使者であり、無駄にできる時間はない。私たちの主イエス・キリストの同労者であろうとする者は、この書に見いだされる真理に深い関心を示すであろう。彼らは筆と言葉をもって、キリストが天から来て明らかにしようとした驚くべき事柄を、平易に示そうと努めるであろう。」 Signs of the Times, 1906年7月4日。

100年以上前の1906年、間もなく「私たちは、キリストがヨハネに示した起こるべき出来事の成就の時期に入るだろう」と知らされた。1906年の時点でも、そのメッセージはなお封印されていた。イエス・キリストの黙示のメッセージは、出来事が起こる直前に神の民に開かれるのだということを理解することが重要である。黙示録という書は「その名が示すとおり、この地球の歴史の終わりの日々にかかる最も重要な出来事の黙示である」と私たちは教えられている。

それらは、神の民が警告を発することができ、またその警告を聞く者たちが「まもなく起ころうとしている出来事に備える機会を持つ」ことができるように開かれている。注目すべきは（メッセージが宣べ伝えられるべき時代においてヨハネは神の民を代表している）、ヨハネが自分が迫害されていた二つの理由を指摘していることである。彼が「神の言葉とキリストの証を忠実に信頼した」ために、「パトモス島に追放された」のである。彼は、聖書と「イエスの証」である預言の霊の双方を受け入れていたために追放されたのだ。

私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると彼は私に言った。「そんなことをしてはならない。私はあなたや、イエスの証しを持つあなたの兄弟たちと同じしもべである。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのだから。」ヨハネの黙示録 19章10節

ヨハネは、イエス・キリストの黙示のメッセージを理解し、聖書と預言の霊の双方を堅く守るがゆえに迫害される、世の終わりの民を代表している。

第1章の最初の三節では、父なる神とそのしもべたちとの間の伝達過程が強調されている。第22章は、この伝達過程に関する叙述をさらに補っている。これら二つの箇所は『黙示録』の始まりと終わりをなすものであり、合わせて、預言的な描写におけるヨハネの役割を詳述している。彼は単に『黙示録』の言葉を書き記した者ではなく、世の終わりに最後の警告のメッセージを伝える人々をも代表している。

主は御言葉を与えられた。これを宣べ伝える者は大勢いた。詩篇 68:11

ジョンは、メッセージを構成する「事柄」を「見た」り「聞いた」りし、メッセージを書いて諸教会に送るよう命じられた。

こう言われた、「わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたが見ることを書物に書き、アジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」ヨハネの黙示録 1:19.

彼が「聞いた」ことと「見た」ことは、書き記して小アジアの七つの教会に送るよう命じられた。しかし、個々の教会に関しては、イエスが直接ヨハネにメッセージを口述した。というのも、七つの教会それぞれへのすべてのメッセージは、「……にある教会の御使いに書き記せ」という句で始まっているからである。イエスは各教会への個別のメッセージを口述した。

イエスはヨハネに口述し、またヨハネに、彼が見たことや聞いたことを書き記すよう命じ、そして一度は、彼が聞いたことは書いてはならないと告げた。

彼は獅子がほえる時のように大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷が声を発した。七つの雷が声を発し終えたとき、私は書き記そうとしたが、天から私にこう告げる声を聞いた。「七つの雷が語った事柄を封印し、それを書き記してはならない。」黙示録 10:3、4.

ヨハネは、七つの雷が語ったことを封印するよう命じられ、そうすることで七つの雷のメッセージを封印したが、これはダニエルが終わりの時まで自分の書を封印するよう命じられたのと同様である。

しかし、ダニエルよ、この言葉を秘し、この書を封じておけ。終わりの時まで。多くの者があちらこちらを歩き巡り、知識は増し加わる。 . . . 彼は言った、「行きなさい、ダニエルよ。この言葉は終わりの時まで秘され、封じられているからだ。」ダニエル書 12:4、9.

これらの七つの雷が声を発した後、小さな巻物に関して、ダニエルにそうであったように、ヨハネにも命令が下る-「七つの雷が語ったことを封じよ」。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971頁。

私たちが確認しているのは、ヨハネの黙示録の冒頭と結末の両方で、メッセージが示されているということです。そのメッセージがどのように伝えられたかという過程もまた示

されています。そのメッセージを伝えるうえでヨハネが担う役割についても、具体的に言及されています。彼は時に、見聞きしたことをそのまま書き記しました。別のときには口述を受けて書き記し、また一度は、聞いたことを書いてはならないと言われました。イエス・キリストの黙示のメッセージは、父からイエスへ、さらにガブリエルへ、そして教会に宛ててそのメッセージを書き送り届ける責務を与えられた預言者ヨハネへと伝えられました。

あなたが見たこと、今あること、そしてこの後に起こることを書き記せ。ヨハネの黙示録 1:19

その節を読んでも、ヨハネに「書き記せ」と命じる言葉の中に示された預言的原則に気づかないことがあるかもしれない。見聞きした「事柄」を書き留めることは、現在の歴史を記録することを意味する。というのも、ヨハネの時代においてそれらの「事柄」は現に存在していたからである。現在の歴史を記録し、そうすることで同時に将来起こる事柄を書き記すこと—これこそが『黙示録』における主要な預言の原則である。ヨハネは、まさにその原則とその重要性を強調し、例証するために用いられている。彼は本質的に「今あることを書け」と命じられ、そうすることによって「この後に起こること」も書くことになる。歴史は繰り返すからである。この預言的技法はイエスの署名である。というのも、署名とは名を表すものであり、『黙示録』第1章における彼の名はアルファでありオメガである。彼は終わりを初めと結び付けて示す。

私たちは今まさに「イエス・キリストの啓示」の学びを始めたところで、現在は第1章の最初の3節を考察しています。「イエス・キリストの啓示」と題された最後の警告のメッセージは、天の父からイエスへ、イエスからガブリエルへ、そして教会に送るためにそれを書物に記すヨハネへと伝えられます。このメッセージがこれほど直接的に「イエス・キリストの啓示」と名づけられている以上、キリストを啓示する靈感によって与えられた言葉を通じて人々に記されてきた数々の事柄の中でも、イエスがどのような方であるかという特質のひとつが、このメッセージを記録するというヨハネの働きの中に示されていることに注意することが重要です。彼は当時存在していた事柄を書き記しながら、同時に、やがて起こる事柄も書いていたのです。

歴史は繰り返すという真理は、ヨハネが自分の時代のために警告を書き記し、それが将来の時代への警告ともなっていることに示されている。キリスト教会の初めにヨハネが七つの教会に宛てて書いたとき、彼は同時に、世の終わりのキリスト教会への警告も記していた。このキリストのご性質は、キリストが「アルファでありオメガ」「初めであり終わり」「最初であり最後」と呼ばれるときに示される。実際、聖書は、このキリストの性質こそが、彼が唯一の神であることを証明するものだと言っている。

ヨハネの黙示録の第1章で、イエスはご自身をアルファでありオメガであると名乗っておられます。

主の日に、私は御霊の中にいた。すると、背後でラツパのような大きな声を聞いた。『わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたが見るものを書物に書き、アジアにある七つの教会に送りなさい。すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデキアへ。』

そして、私に語りかけるその声の方を見ようとして振り向いた。すると、金の燭台が七つ見えた。七つの燭台の真ん中に、人の子のような方がいて、足もとまで届く衣をまとい、胸のあたりに黄金の帯を締めていた。その頭と髪は羊毛のように白く、雪のように白かった。その目は火の炎のようで、その足は炉で焼かれて光り輝く真鍮のようであり、その声は多くの水のとどろきのようであった。右の手には七つの星を持っており、その口からは鋭い両刃の剣が出ていた。その顔は、強く輝く太陽のようであった。

彼を見たとき、わたしは死人のように彼の足もとに倒れた。すると彼は右の手をわたしのの上に置き、わたしに言われた。「恐れるな。わたしは初めであり終わりである。」
ヨハネの黙示録 1:10-17.

これらの節には多くの真理が含まれているが、ここではただ、ヨハネがキリストのラッパのような声を聞き、自分に語りかけたのが誰であるかを見ようとして振り向いたとき、天の聖所の聖なる所において天の大祭司としてのイエス・キリストを見た、という点を指摘しておきたい。そのときイエスはご自身をアルファでありオメガである者、また最初であり最後である者だと名乗られた。冒頭の三節に記されたメッセージとその伝達において、黙示録の終わりにある真理の筋と対応する真理の筋を私たちは見いだした。アルファでありオメガであるイエスは、初めによって終わりを、最初によって最後を示される。黙示録の終わりにおいても初めと同様に、イエスは再びご自身をアルファでありオメガであると名乗られる。

彼は私に言った。「これらのことばは信実で真実である。聖なる預言者たちの主なる神は、まもなく必ず起こるべき事をそのしもべたちに示すために、その御使いを遣わされた。見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」

そして、私ヨハネはこれらのことを見、また聞いた。私がそれらを聞き、また見たとき、これらのことを私に示した御使いの足もとにひれ伏して拝もうとした。すると彼は私に言った。「それをしてはならない。私はあなたと、あなたの兄弟である預言者たち、そしてこの書の言葉を守る者たちと同じしもべである。神を拝みなさい。」

そして彼は私に言った、「この書の預言の言葉を封印してはならない。時は近いからである。」

不正な者は、なお不正であれ。汚れた者は、なお汚れたままであれ。正しい者は、なお正しくあれ。聖なる者は、なお聖くあれ。

見よ、わたしはすぐに来る。わたしの報いはわたしと共にあって、各人の行いに応じて与えるためである。わたしはアルファでありオメガである。初めであり終わりであり、最初であり最後である。黙示録 22:7-13.

黙示録は、ヨハネがそのメッセージを書き記すに際し、そのメッセージが「初めが終わりを示す」という原則に基づいていることを、丁寧に述べている。そのメッセージは黙示録で最初に明らかにされる真理であり、同じ真理がこの書の最後にも語られる。そして黙示録の冒頭と結びの証しにおいて、イエスはご自身をアルファでありオメガであり、初めであり終わりであり、最初であり最後であると示している。

ヨハネの黙示録の最初の三節は、人類への最後の警告メッセージを示している。これは、最後の七つの災いとキリストの再臨に先立つ警告である。イエス・キリストの黙示のメッセージは、「彼の御使いによって」「送られ、しるしによって示された」ものであった。

その同じ警告のメッセージは、黙示録の最後の箇所でも示され、また、黙示録14章の第三の天使としても表されている。

また、第三の天使が彼らに続いて、大声でこう言った。だれでも、獣とその像を拝み、額に、または手にその刻印を受ける者がいるなら、その者は、薄められることなく神の憤りの杯に注がれた神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、聖なる天使たちの前で、また小羊の前で、火と硫黄によって苦しめられる。そして、その苦しみの煙は世々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者、またその名の刻印を受ける者は皆、昼も夜も安らぎがない。黙示録 14:9-11

最後の警告のメッセージは、第三の天使として表されている。それは人類にとっての最後の試練を直接示しているため、最後の警告である。第三の天使に続いてこれに加わる別の天使がおり、その天使もまた最後の警告のメッセージである。

これらのことの後、私は、別の御使いが大いなる権威を帯びて天から下って来るのを見た。彼の栄光によって地は輝いた。彼は力強い大声で叫んで言った。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪霊どもの住まい、あらゆる汚れた霊の巢窟、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。というのも、すべての国々が彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫行を行い、地の商人たちは彼女のぜいたくの豊かさによって富み栄えたからである。」

また、私は天から別の声がこう言うのを聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。あなたがたが彼女の罪にあずからず、また彼女の災いを受けないためである。というのは、彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである。」ヨハネの黙示録 18:1-5。

イエス・キリストの啓示というメッセージは、黙示録の第1章、第14章、第18章、第22章において示されている。このメッセージは、黙示録の最初と最後の言及では天使ガブリエルであるとされる天使によって示され、さらに第14章と第18章では、天を飛ぶ、または天から下ってくる天使によって象徴的に表されている。

黙示録十八章で天から下ってくる天使は、十章で一人の天使が降り、一方の足を地に、他方の足を海に置く場面によって、あらかじめ象徴されています。その天使は、ヨハネに食べるよう命じられた巻物を手にしており、それは口には甘く、腹には苦いものでした。ヨハネが食べるその巻物はメッセージを表しており、その小さな巻物が象徴するメッセージは黙示録十八章の天使のメッセージを前もって象徴しています。したがって、それもまた最後の警告のメッセージを表しているのです。

私たちは、神のメッセージが天使によって送られ、示されたと教えられている。そして、黙示録に描かれている最後の警告のメッセージを注意深く探すと、七度にわたり天使がその最後の警告のメッセージを示していることがわかる。最初と最後の例では、それは天使ガブリエルであった。次に、黙示録10章では、手に小さな巻物を持って降りてくる天使

がいる。黙示録14章では、さらに三人の天使が現れ、いずれも最後の警告のメッセージを表している。そして黙示録18章では、まったく同じ最後の警告のメッセージを表す別の天使がいる。七つの最後の警告のメッセージは天使によって表されている。最初と最後は天使ガブリエルであり、その最初と最後の間にいる五人の天使は象徴的な天使である。

もちろん、七つの教会それぞれにも天使がいますが、その天使たちは教会に向けたメッセージを携えています。一方、私たちがこれまで論じてきた最後の警告のメッセージは、全世界を対象とするものです。

最終的な警告メッセージを表す七つの預言的なラインは、それぞれ綿密に評価され、互いに整合させられるべきである。しかしこの時点では、私はアルファとオメガの基本原則を簡潔に定義するにとどめたい。神の言葉の中である主題が初めて言及される箇所が、最も重要な参照点である。聖書で「種」が最初に言及されるのは創世記1章11節で、そこで種は「それぞれの種類に従って」生じると告げられている。種の最初の言及は、それが自己複製に必要なDNAを備えていることを強調している。イエスは神の言葉を種にたとえられた。

その日、イエスは家を出て海辺に座った。大勢の群衆が彼のもとに集まってきたので、彼は舟に乗って座り、群衆は皆、岸に立っていた。彼は彼らにたとえで多くのことを語り、こう言った。

見よ、種を蒔く人が種を蒔きに出て行った。彼が蒔いていると、ある種は道ばたに落ち、鳥が来てそれを食べてしまった。別の種は土の少ない岩地に落ち、土の深みがないので、すぐに芽を出した。しかし日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。また、ある種はいばらの間に落ちたが、いばらが伸びてそれをふさいだ。ところが、ほかの種は良い地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。聞く耳のある者は聞きなさい。

そして、弟子たちが彼のもとに来て言った。「なぜ彼らにはたとえでお話しになるのですか。」

彼は彼らに答えて言われた。「なぜなら、天の御国の奥義を知ること、あなたがたには与えられているが、彼らには与えられていないからである。持っている者にはさらに与えられていよいよ豊かになり、持たない者からは、持っているものさえ取り上げられる。だから私は彼らにはたとえで語る。彼らは見ているも見ず、聞いていても聞かず、理解もしないからである。こうしてイザヤの預言が彼らのうちに成就している。『あなたがたは聞きはするが、理解しない。見てはいるが、悟らない。というのは、この民の心は鈍くなり、耳は聞こえにくくなり、目は閉じてしまったからだ。そうでなければ、彼らは目で見、耳で聞き、心で悟って立ち返り、わたしは彼らを癒すであろう。』」

しかし、あなたがたの目は、見ているので幸いである。あなたがたの耳も、聞いているので幸いである。誠にあなたがたに言うが、多くの預言者や義人が、あなたがたの知っているものを見たいと願ったが、見られず、あなたがたの聞いているものを聞きたいと願ったが、聞けなかった。

それゆえ、種をまく人のたとえを聞きなさい。

だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪い去る。これが、道端に蒔かれたものに当たる人である。

しかし、岩地に種を受けた者とは、ことばを聞いて、すぐに喜んでそれを受け入れる人である。けれども自分のうちに根がなく、しばらくの間だけ続く。ことばのために苦難や迫害が起こると、たちまちつまずいてしまう。

また、いばらの中に種を受けた者とは、御言葉を聞く人であるが、この世の思い煩いと富の惑わしが御言葉をふさぎ、実を結ばなくなる。

しかし、良い地に蒔かれるとは、御言葉を聞いて悟る人のことである。その人は実を結び、ある者は百倍、ある者は六十倍、ある者は三十倍の実を結ぶ。マタイ 13:1-23

神の言葉である種は、完全な植物を生み出すのに必要なDNAをすべて備えている。神の言葉におけるある主題の最初の言及には、その主題に関するあらゆる要素が含まれている。この事実は「初出の法則」と呼ばれる。この法則を詳しく検討すればするほど、その確かさはいっそう明らかになる。

アルファとオメガ、そして神の言葉を種と定義することについての説明を続ける前に、先ほど引用したマタイの箇所に基づき、黙示録を考えるうえで関連するいくつかの点を検討しておく価値がある。すべての預言者は世の終わりについて語っている。

「古代の預言者たちは、それぞれ自分たち自身の時代のためよりも、むしろ私たちの時代のために語ったのであり、それゆえ彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『これらの事が彼らに起ったのは、私たちへの戒めのための前例としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいる私たちを戒めるためである。』コリント人への第一の手紙 10:11。『彼らは、自分たち自身のためではなく、あなたがたのために、それらのことに仕えていたのであって、そのことは、今や天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、あなたがたに告げ知らされているのである。それは御使いたちも、うかがい見たいと願っている事柄である。』ペテロの第一の手紙 1:12. …」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

この箇所は、すべての預言者が世の終わりについて語っているという事実、そしてそれこそが『ヨハネの黙示録』に秘められた奥義の封印が解かれる時であることを証言する三人の証人（パウロ、ペテロ、エレン・ホワイト）を提示している。したがって、マタイ13章でイエスが「見ているゆえにあなたがたの目は幸いであり、聞いているゆえにあなたがたの耳は幸いである。まことにあなたがたに言う。多くの預言者や義なる人々は、あなたがたが見ている事柄を見たいと願ったが見ることができず、あなたがたが聞いている事柄を聞きたいと願ったが聞くことができなかった」と言われたとき、彼は黙示録1章の最初の三節に記されているのと同じ祝福を述べておられたのである。

この預言のことばを読む者と、これを聞き、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。ヨハネの黙示録 1:3

イエスは種を蒔く人のたとえを語り、その後、弟子たちはそのたとえについて彼に問いかけるよう導かれた。だが、彼らがイエスとやり取りする前に、彼は彼らのために、そして何よりも私たちのために、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

イエスはたとえを語り、それを、聞こうとする者たちへの警告で締めくくる。次に弟子たちは議論へと導かれ、そこでイエスは少なくとも三つの重要な考えを取り上げる。彼は聞き手を二つの類に区別し、その際、聞き手が二つの類であることの第二の証しとしてイザヤ書の一節を引く（すべては聞こうとする者たちという文脈に置かれていることを覚えておこう）。彼が提示する第三の考えは、聞き手の二つの類と第二の証しとしてのイザヤ書という点を越えて、神のことばは種であるという事実である。したがって、神のことばが種であるという事実は、黙示録第一章でイエス・キリストの啓示を聞く者たちが聞くべき事柄の一部である。最初の三節には二人の聞き手がいるが、ちょうどマタイ十三章に二つの聞き手の類があるのと同様である。マタイ十三章は、聞くことを拒む人々がどのようにして聞かないことを選ぶのかというさまざまなあり方への洞察を付け加えているにすぎない。そしてイザヤの証しは、私たちが聞くべきメッセージにさらに多くを付け加える。

ウ ज्या王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その衣の裾は神殿を満たしていた。その上にはセラフィムたちが立っており、それぞれ六つの翼を持ち、二つで顔を覆い、二つで足を覆い、二つで飛んでいた。彼らは互いに呼び交わして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。その栄光は全地に満ちている。」叫ぶ者の声によって戸口の柱が揺れ動き、神殿は煙で満たされた。

そのとき私は言った。「ああ、わざわざ、私は滅びる。私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民のただ中に住んでいるからだ。わが目が王である万軍の主を見たからだ。」

そのとき、セラフィムの一人が私のところに飛んで来た。彼の手には燃える炭があり、それは彼が祭壇から火ばさみで取ったものであった。彼はそれを私の口に当てて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れた。あなたの咎は取り去られ、あなたの罪は清められた。」

また、主がこう言われるのを私は聞いた。「誰を遣わそうか。我らのために行く者は誰か。」そこで私は言った。「ここに私があります。私をお遣わしてください。」

彼は言った。「行って、この民に告げよ。『聞け、しかし悟るな。見よ、しかし知るな。』この民の心を鈍らせ、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、癒やされることのないように。」

そこで私は言った、「主よ、いつまでですか。」すると彼は答えた、「町々が住む者もなく荒れ果て、家々には人がいなくなり、地がことごとく荒廃し、主が人々を遠くへ移され、この地のただ中が大いに見捨てられるまで。」しかしなお、その中に十分の一が残り、それは戻って来るが、また食い尽くされる。葉を落としても、なお幹が残るテレブの木や榿の木のように、聖なる種がその幹となる。イザヤ書 6:1-13.

もちろん、イザヤ書のこの箇所は、扱っている預言的テーマの深みという点で、まさに驚嘆すべきものです。これらのテーマの多くは『ハバククの表』で繰り返し論じられてきたので、ここでは、イエスがご自身の御言葉を種にたとえられたという言及に関する私たちの考察を裏づける、この箇所からの要点だけを簡潔にまとめます。

この箇所においてイザヤは預言者、すなわち時の終わりの神の民を表していることがすでに明らかになっている。私たちの論点にとってさらに重要なのは、イザヤが、神の教会のうちで活動しながら罪のうちに生きていた民を代表しているという点である。イザヤが神の栄光の啓示を受けるまで、彼は自分の罪深さを認識していなかった。彼はラオデキア的で、盲目であった。

イザヤは他者の罪を糾弾していた。だが今や、彼は、自分自身が、彼らに言い渡したのと同じ断罪のもとにあることを悟った。彼は神を礼拝するにあたり、冷たく命のない儀式で満足していた。主の幻が彼に与えられるまで、彼はそのことを知らなかった。聖所の神聖さと威厳を仰ぎ見たとき、彼の知恵や才能が、今やいかに取るに足らないものに見えたことか。なんと自分はふさわしくないことか！なんと聖なる務めに不向きであることか！彼の自分自身に対する見方は、使徒パウロの言葉で表すことができる。「ああ、私はみじめな人間だ。だれがこの死の体から私を救い出してくれるのか。」

しかし、苦難の中にあったイザヤには救いがもたらされた。「すると、セラフィムの一人が祭壇から火ばさみで取った燃える炭を手を持って、わたしのもとに飛んできた。彼はそれをわたしの口に触れさせて言った。『見よ、これがあなたの唇に触れた。あなたの咎は取り去られ、あなたの罪は清められた。』」イザヤ書6章6、7節。

イザヤに与えられた幻は、終わりの時代における神の民の状態を表している。彼らは、信仰によって、天の聖所で進められている働きを見る特権を与えられている。「天にある神の神殿が開かれ、その神殿の中に神の契約の箱が見えた。」彼らが信仰によって至聖所を仰ぎ見て、天の聖所におけるキリストの働きを見るとき、彼らは自分たちが唇の汚れた民、すなわちその唇がしばしば虚しいことばを語り、その賜物も聖別されずに神の栄光のために用いられてこなかった民であることに気づく。彼らが自らの弱さとふさわしくなさを、栄光に満ちたキリストの品性の清さと麗しさと対比するとき、絶望するのも無理はない。しかし、もし彼らがイザヤのように、主が心に与えようと意図しておられる感化を受け、神の前に魂をへりくだらせるなら、彼らには望みがある。御座の上には約束の虹があり、イザヤのために行われたわざが彼らのうちにも行われる。砕かれた心からの願いに、神は応えてくださる。

神のこの大いなる厳粛な御業の目的は、天の穀倉に刈り束を集めることである。というのも、地は主の栄光で満たされるからである。ゆえに、はびこる悪を見、不浄な唇から出る言葉を聞いても、だれひとりひるんではならない。やみの勢力が神の民に対して陣を敷き、サタンが最後の大いなる闘争のためにその軍勢を召集し、その力が大きく、ほとんど圧倒的に見えるとき、まさにそのとき、神の栄光のはっきりとした幻——高く上げられた御座に、約束の虹が弧を描いてかかっているその光景——が、慰めと確信と平安を与えるであろう。Review and Herald, 1896年12月22日

その幻は「終わりの日々における神の民の状態を表している」。終わりの日々における神の民はラオディキア人である。

ラオディキア人の教会の御使いにこう書け。アーメンであり、忠実で真実な証人、神の創造の初めである方がこう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくも熱くもない。むしろ冷たいか熱いかであってほしい。だから、あなたが生ぬるく、冷たくも熱くもないので、わたしはあなたをわたしの口から吐き出す。あなたは「私は富んでいる。財産が増し加わり、何も必要ない」と言うが、自分が惨めで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。わたしはあなたに勧める。火で精錬された金をわたしから買い、富む者となるように。また、白い衣を買って身にまとい、あなたの裸の恥が現れないようにしなさい。そして、眼薬をあなたの目に塗って、見えるようになりなさい。

わたしの愛する者は皆、わたしは叱り、懲らしめる。だから、熱心になって、悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入り、彼と共に食事をし、彼もまたわたしと共に食事をする。勝利を収める者には、わたしと共にわたしの御座に着くことを許そう。わたしもまた勝利を収め、わたしの父と共にその御座に着いたように。

耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。ヨハネの黙示録 3:14-22

ラオディキアの教会へのメッセージは驚くべき糾弾であり、現在の神の民にも当てはまる。

「ラオディキアにある教会の御使いに書き送れ。アーメン、忠実で真実な証人、神の創造の初めである方がこう言われる。『わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくも熱くもない。むしろ冷たいか、熱いかであってほしい。だから、あなたが生ぬるく、冷たくも熱くもないので、わたしはあなたをわたしの口から吐き出そう。あなたは「私は金持ちだ。豊かになり、何一つ必要なものはない」と言うが、自分が実は、みじめで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。』」

主はここで、民を警告するために召された奉仕者たちが神の民に携えていくべきメッセージが、平安と安全を説くものではないことを私たちに示しておられる。それは単なる理論ではなく、あらゆる点で実践的である。ラオディキア人へのメッセージにおいて、神の民は肉的な安逸の状態にある者として描かれている。彼らは安んじて、自分たちは高い霊的達成の境地にあると信じている。「あなたは『私は富んでいる。豊かになった。何も必要なものはない』と言っているが、自分が実は惨めで、哀れで、貧しく、盲目で、裸であることを知らない。」

彼らはことごとく誤っているのに自分は正しいと確信するほどの欺きが、人間の心にほかにあろうか！ 真の証人のメッセージは、神の民が悲しむべき自己欺瞞の中にあるながら、その欺瞞においては誠実であることを見いだす。彼らは、自分たちの状態が神の目から見て嘆かわしいものであることを知らない。宛てられた者たちが、自分たちは高められた霊的状态にあるのだと自らをおだてている間に、真の証人のメッセージは、彼らの霊的盲目、貧しさ、みじめさという真の状態を驚くべき断罪によって明らかにし、その安穩を打ち砕く。このように鋭く厳しい証言が誤りであるはずがない。語っているのは真の証人であり、その証言は正しいに違いないからである。

自分の達成に安住し、自分は霊的な知識に富んでいると信じている者たちにとって、自分たちは欺かれており、あらゆる霊的な恵みを必要としていると告げるこのメッセージを受け入れるのは難しい。聖められていない心は「何よりも人を欺き、はなはだしく邪悪である」。私は、多くの者が、イエスからの光を一筋たりとも持たないのに、自分は良いキリスト者だとうぬぼれていることを示された。彼らには、神のいのちにあずかる生きた経験がない。彼らが、御霊の尊い恵みを獲得するために熱心で忍耐強い努力を自分たちに真に必要だと感じるようになるには、まず神の御前での深く徹底したへりくだりの働きが必要である。『証言』第3巻、252、253ページ。

イザヤはラオデキア的な状態から回心すると、世界に最後の警告のメッセージを伝えることを志願した。第6章3節は、天使が降り、その栄光で地を照らす黙示録18章の預言史と、イザヤの預言史を結びつけている。

この後、私は大いなる力を持つ別の天使が天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。黙示録 18:1。

イザヤは、黙示録18章の天使が下ってくる時代における神の民を代表している。彼が天の聖所に連れて行かれたとき、セラフィムが「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光で満ちている」と宣言するのを聞いたからである。イザヤは、黙示録のヨハネと同様に、最後の警告のメッセージを宣べ伝える神の民を代表している。ヨハネは神の民を「残りの者」と呼び、イザヤは彼らを「十分の一」、すなわち「什一」と呼んだ。ヘブライ語の語根は「十分の一をささげる」という意味である。

イザヤが発した預言的な問い「いつまでですか」は、神の言葉の中で繰り返し問われている（手短かに言えば、この「いつまでか」という問いへの答えは、アメリカ合衆国における国家的な日曜法の到来を指し示す、ということである）。エレン・ホワイトによれば、その時「国家的背教のあとには国家的破滅が続く」のであり、イザヤによれば、それは「町々は住む者なく荒れすたれ、家々には人がなく、地はことごとく荒れ果て、主が人々を遠くへ移され、この地のただ中が大いに見捨てられる」時である。「地のただ中が大いに見捨てられる」ことは、ダニエル11章41節によれば、日曜法の時に打ち倒される「多くの者」を指している。彼らは、イザヤ書6章とマタイ13章に描かれる、目があっても見ず、耳があっても聞かない者たちであり、また、黙示録3章にあるラオデキアの教会への勧告を拒む者たちでもある。

彼はまた美しい地に侵入し、多くの国々は打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

イザヤは、ご自身の聖所でイエス・キリストの幻を見た。これは黙示録におけるヨハネも同様である。イザヤは、「戻ってくる」そして木のように「食べられる」『十分の一』、すなわち什一を表している。「食べられる」と訳されているヘブライ語は、火によって焼き尽くすことを意味する。だが、その『十分の一』のうちには、火が焼き尽くさない「実体」がある。どうやら、十分の九にはその実体がなかったのだろうか。テイルの木や樫の木を食い尽くすものとして描かれているその火は、マラキ書で突然ご自分の神殿に来られる「契約の使者」の火である。

見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求めている主、すなわちあなたがたが喜びとする契約の使者が、にわかにご自分の宮に来る。見よ、彼が来る、と万軍の主は仰せられる。

しかし、彼の来られる日を誰が耐えうるだろうか。彼が現れるとき、誰が立っていられようか。彼は精錬する者の火のようで、さらし屋の灰汁のようである。彼は銀を精錬し清める者として座り、レビの子らを清め、金や銀のように彼らを精錬して不純物を取り除き、彼らが主に義にかなう供え物をささげるようにする。そのとき、ユダとエルサレムの供え物は、昔の日のように、いにしえの年々のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4。

イザヤの「十分の一」（すなわち什一）は、マラキの「義のささげ物」でもある。マラキの「ささげ物」は神の民であり、彼らは「レビの子ら」として表され、火によって清められて「義のささげ物」をささげる。そして、イザヤの証しにおいて火に「食い尽くされる」者たちは、十分の一、すなわち什一である。

私に与えられた神の恵みによって、熟練した建築家のように、私は土台を据え、ほかの者がその上に建てています。ただし、各人はどのようにその上に建てるかに注意하십시오。すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外に、だれもほかの土台を据えることはできません。さて、もしだれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、干し草、わらで建てるなら、各人の業は明らかになります。その日はそれを示すからです。というのは、それは火によって現され、火が各人の業がどのようなものであるかを試すからです。コリント人への第一の手紙 3:10-13

ここでパウロは、すべての人の行いが「火」によって明らかにされると宣言している。マラキ書では、その火が不純物を焼き尽くす。イザヤ書では、「十分の一」の清めは、葉を落とす「とき」に行われる。葉は、アダムとエバの例が示すように、隠された罪、見せかけ、思い上がりの象徴である。

イザヤの「十分の一」は、その内に焼き尽くされることのない本質を持っており、その本質こそが「聖なる種」である。彼らの内には、栄光の望みであるキリストがおられる。イザヤ自身も「聖なる種」であり、また彼が指し示す「十分の一」でもある。「聖なる種」と「十分の一」はともに、主の聖所におけるイエス・キリストの啓示を通して、ラオディキアの状態からフィラデルフィアの状態へと戻る。

イザヤに、自分は滅びた、汚れた者であり、赦しを必要とする罪人だと叫ばせる神の栄光の幻は、木々が葉を落とすとき、天の聖所で起こる。「cast」という語は「投げ出す」または「木を切り倒す」という意味である。ここにはラオディキアの追放が表されている。「十分の一」、すなわち残りの者は、マラキの「契約の使者」によってもたらされる清めの「火」をくぐり、その結果、人間的な業は霊的に焼き尽くされ、焼き尽くすことのできない「実体」、すなわち「聖なる種」だけが残る。聞こうとしない者は、枯れた乾いた葉のように投げ捨てられるか、主の口から吐き出されるだろう。

イエスは聖なる種であり、種には植物全体を生み出すために必要なDNAがすべて備わっている。神のことは種であり、したがって神のことは種におけるある事柄の最初の言及には、もしそれが正しく理解されるなら、信者のうちでその主題を完全に成熟させるために

必要な情報がすべて含まれている。

イザヤ書6章は、イエス・キリストの啓示のメッセージによって祝福を受けるためには必ず「聞く」べき時期に、「聞かない」民を指摘している。イエスが言及したその人々は、神に選ばれた民であり、神の妻であり、神の契約の民であり、古代イスラエルであった。

古代イスラエル、すなわち最初のイスラエルは、現代イスラエル、すなわち最後のイスラエルの型である。世の終わりにおける神の民はセブンスデー・アドベンチストであり、神に選ばれた民、神の妻、契約の民、すなわち現代イスラエルである。イザヤの歴史の証言は、キリストの歴史と相まって、世の終わりにセブンスデー・アドベンチズムが、ラオデキアへのメッセージにおいて表されている、失われた、救いようのない「状態」に陥っていることを確証する二人の証人となる。

彼らは実際には救いようがないわけではなく、ただラオデキア的な状態にあるがゆえに救えないだけであり、これはイザヤがその体験をする前や、キリストの歴史におけるユダヤ人がそうであったのと同様である。

ラオデキア人が「聞く」べきことの一つは、種まきのたとえである。彼はそのたとえの中で、神のことばが「種」、すなわち聖なる種であることを「聞かなければならない」。それを「聞いた」とき、土台が据えられ、黙示録の秘められたメッセージが開かれ始める。なぜなら、そのメッセージは、イエスがアルファでありオメガであり、最初であり最後、初めであり終わりであるという深い認識に込められているからである。終わりと初めの関係を理解することには、イエスが「ことば」であり、また「種」であることを理解することが含まれる。

初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉は初めに神とともにあった。すべてのものは彼によって造られた。造られたもので、彼によらずにできたものは一つもなかった。彼のうちに命があった。その命は人の光であった。光は暗闇の中に輝いている。暗闇はこれに打ち勝たなかった。ヨハネによる福音書 1:1-5。

さて、約束はアブラハムとその子孫に与えられた。『そして子孫たちに』と、多くを指すようには言わず、むしろ『そしてあなたの子孫に』と、一人を指して言っている。それはキリストである。ガラテヤ人への手紙 3章16節。

終わりと始まりの関係を理解するには、「初出の法則」を理解する必要がある。初出の法則は、ある主題についての最初の言及が最も重要であることを示している。そこには物語全体が含まれており、神の御言葉である以上、それは種だからである。最後の言及は、重要度では二番目である。というのも、そこで物語のあらゆる要素が結び合わされ、どんなほつれも残らなくなるからだ。しかし、物語に力と明晰さを与えるのは、主題の中間にある言及であり、その意味で中間もまた、始まりや終わりと同じくらい不可欠である。

この主題についてはまだ取り上げるべきことが多くあるが、マタイ13章の箇所に戻ると、イエスは、聞く者と聞かない者という二つの種類の人々を示しておられることに気づく。彼は、聞かないにも複数のあり方があることを指摘し、しかしそのうえで、聞く者たちに祝福を宣言しておられる。

しかし、あなたがたの目は幸いです。見ているからです。あなたがたの耳も幸いです。聞いているからです。まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったのに見られず、あなたがたが聞いているものを聞きたいと願ったのに聞けませんでした。だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。マタイ 13:16-18.

預言的には、この「祝福」は、したがってヨハネの黙示録1章3節の祝福とまったく同じである：

この預言のことばを読む者は幸いです。それを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちも幸いです。時は近いからである。

マタイ13章におけるイエスのイザヤ6章への言及は、エレン・ホワイトの著作と相まって、世の終わりに見聞きされる事柄があることを裏づけている。それらはあまりに重大で、多くの義人や預言者が、最終警告のメッセージの封印が解かれるその時代に生きたいと望んだほどであり、人々はそのときそれらを「見る」そして「聞く」ことになる。

第十章で、ヨハネは「七つの雷」が語ったことを封印するように告げられ、第二十二章では「この書の預言のことばを封印してはならない。時が近づいているからである」との布告がなされている。次の節は、人類の猶予期間の終結を示す。猶予期間が終わる直前に、「七つの雷」の封印を解くようにとの布告があり、その時点で封じられているのは、黙示録の中でその箇所だけである。「七つの雷」については、それがアドベンチズムの始まりと終わりを表していると知らされている。

「ヨハネに与えられ、七つの雷のうちに表された特別な光は、第一と第二の天使のメッセージのもとで起こる出来事の描写であった。……」

この七つの雷がその声を発したのち、小さな書について、ダニエルと同様に、ヨハネに命令が下る。「七つの雷が語った事柄を封じよ。」これらは、順を追って明らかにされる将来の出来事に関するものである。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971ページ。

七つの雷は、1798年から1844年10月22日までの、第一および第二天使のメッセージの歴史におけるアドベンチズム黎明期の出来事を表している。前述の同じ記事でも、七つの雷は「その順序に従って明らかにされる将来の出来事に関係している」と知らされている。アドベンチズムの初期の歴史はアドベンチズムの終わりを示している。というのも、アルファでありオメガであるイエス・キリストが、それが古代イスラエルの歴史と同様に聖なる歴史であるがゆえに、アドベンチズムの全歴史にご自身の印を押しておられるからである。

マタイの福音書13章でイエスは、これらの出来事は預言者たちが見たいと願っていたものであり、それを知ることによって弟子たちは祝福された、と言われた。その弟子たちは、世の終わりに、自分たちの見聞きすることのゆえに祝福される神の民を象徴している。彼らが見聞きするのはイエス・キリストの啓示のメッセージであり、それはまた七つの雷のメッセージによっても表されている。七つの雷は、ミラライト運動の歴史と十四万四千人の歴史の双方を象徴している。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見えているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神のご定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

エレン・ホワイトは、キリストが義人たちが見たいと望んだ歴史として指し示した歴史を、1840年から1844年にかけてのミラー派の歴史であると特定し、さらに「まもなく神のご定めによって、大いなる叫びへと高まるメッセージが与えられる」と述べている。この「大いなる叫び」は第三天使の最終警告を象徴しており、そのメッセージが与えられるとき、アドベント主義の始まりの歴史が繰り返されることになる。最終警告のメッセージとは、「すべての教会に伝えられるべき」メッセージ群であり、1840年から1844年に与えられた「すべてのメッセージは、今、力強いものとされるべきである」。

アルファでありオメガである方は、初めによって終わりを示しておられる。エレン・ホワイトは「そのメッセージはすべての教会に届けられるべきである」と述べ、イエスはヨハネにこう告げられた。「わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたの見たことを書物に書いて、アジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」

1840年から1844年にかけてのメッセージは、各教会に送るべきものの一部である。